

## 第 13 回 その他のワイルド紹介

これまで第 1 回から第 12 回までの中で特段に取り上げていないものを中心にワイルドの様々な紹介を取り上げて行きたい。

### ( 1 ) 人物の紹介

ワイルドの人物を紹介している文献は決して多いとは言えない。明治 16 年 (1883)3 月の *The Japan Punch* の記述はあるが、その後、*De Profundis* 出版を契機にワイルドの生涯の一部を紹介しているものが少しずつ出てきた。しかし、そのおもな内容は、オックスフォードへの進学、獄中生活といったことへの言及にとどまっている。その他は唯美主義者あるいはデカダンスの代表者としての紹介が中心である。伝記的な紹介については、本間久雄「オスカア・ワイルド論」(『早稲田文学』第 64 号、1911 年 3 月)にも一部紹介されているが、本格的なものとなると、明治時代には登場していない。

明治 44 年(1911)5 月の国枝史郎「オスカー・ワイルドの死」(『読売新聞』5 月 14 日、21 日)というタイトルの文章もあるが、残念ながらオスカー・ワイルドへのレクイエムのような形式をとっている。その一部を紹介しておこう。

オスカー、ワイルドよ！「現代社会に対して、シンボリックなるもの」  
と自ら云つたオスカー、ワイルドよ。<sup>(1)</sup>

こうした呼びかけがあり、さらに次のような内容もある。

オスカー、ワイルドよ！お前の美しさはユダヤの王女が戀したと云ふヨ  
ハネのやうに美しい。けれどもお前が愛した美人や美少年は、サロメの  
やうに熱情の心を持ってはゐなかつた。<sup>(2)</sup>

ワイルドの生涯を紹介しているものではないが、これまでにないワイルドへの

思いを表現したものとして紹介した。

ワイルドの人物を紹介したものとして、彼の生涯を著した本の紹介という形式のものがある。例えば、明治 41 年(1908)12 月の安成貞雄「海外文壇消息」(『趣味』第 3 巻第 12 号)には Robert H. Sherard の *Oscar Wilde: The Story of an Unhappy Friendship* が紹介され、明治 42 年(1909)3 月にも岩野泡鳴「私行上から見たオスカー・ワイルド」(『趣味』第 4 巻第 3 号)として同じ本の紹介がなされている。ワイルドの数奇な生涯について感心を寄せたものである。明治 42 年(1909)6 月には野口米次郎「オスカー、ワイルドの一面」(『太陽』第 15 巻第 8 号)で、アンドレ・ジイドの「オスカア・ワイルド論」を抄訳して、紹介されていることや明治 45 年(1912)3 月の川島金五郎「オックスフォード大学に於ける文豪の学生時代 同窓の迫害を物ともせざりしオスカー・ワイルド」(『文章世界』第 7 巻第 4 号、博文館)もあることを付け加えておきたい。

## ( 2 ) 戯曲の紹介

*Salome* は森鷗外によって明治 40 年(1907)に『歌舞伎』(第 88 号)に「脚本『サロメ』の略筋」として紹介され、その後、翻訳もすぐに発表されたことは周知の通りだ。明治 41 年(1908)7 月の戸川秋骨「オスカー・ワイルドの戯曲の一節」(『文章世界』第 3 巻第 9 号、博文館)では『サロメ』が紹介されているが、同年同月にはワイルドの戯曲の紹介がかなりまとまった形で紹介した是影生「オスカア・ワイルドの戯曲」(『帝国文学』第 14 巻第 7 号)も発表されている。その後は個々に戯曲が紹介、あるいは翻訳されたものとして、明治 42 年(1909)2 月の岩野泡鳴「ワイルドの社会喜劇『熱心の大切な事』」(『早稲田文学』第 39 号)、明治 43 年(1910)には金子健二訳「フロレンスの悲劇」(『心の花』第 14 巻第 4 号)、明治 44 年(1911)11 月 12 日から内田魯庵訳『革命婦人』(『東京朝日新聞』)の連載が始まっている。さらに風習喜劇の *The Importance of Being Earnest* を森嶋峰が翻訳した『手提鞆』も注目してよいだろう。

ここでは翻訳というよりは、戯曲を紹介した是影生「オスカア・ワイルドの戯曲」をもう少し見てみたい。最初はワイルドの生涯について触れ、その後、明治41年(1908)にメシュエン社より出版された『ワイルド全集』(全13巻)の *Vera, or The Nihilists, The Duchess of Padua, A Florentine Tragedy* について触れている。この作品の紹介は、「彼の戯曲で是迄正式に英國で出版されなかったものが三つある」<sup>(3)</sup>と述べているが、「固より新に公にされた此三篇はワイルドの他の傑作に比肩する資格のあるものではないが、此作者が作曲の手腕と其限界とを察するには矢張重寶なものに違ひない」<sup>(4)</sup>とも述べている。是影生の主眼は、ワイルドの劇作家としての態度に注目したものだ。

ワイルドが戯曲を作るのは商賣だからだ、金儲けの為だ。彼の戯曲は需要供給の法則に嚴重に支配されて居る。故にあれ程の手腕を持ちながら、割合に個性があらはれない。勿論どんな美術家だって金儲けをして悪い理由はない、誰でも生きて居るには食はねばならぬ。但不幸にしてワイルドは澤山の金が一度に必要であつた。<sup>(5)</sup>

さらに、

ワイルドが戯曲を軽視した因果は直ちに共身に報い來た。對話や描写や其他舞台上の感覚にあれ程鋭かつた人が、イブセン、ハウプトマンの時代、ストリンドベルヒ、プリウの時代に生れ乍ら、サルツウの結構、小デュマの思想に満足せざるを得なかつたのは何の為であるか。彼が其脚本によりて求むる處は成効だ、人目の眩惑だ。傑作と稱する非商賣的のものを作るは彼の野心ぢやない。十九世紀後半の劇壇がワイルドの才能を認めて而も其墮落を救ふ能はざりしは、其罪畢竟彼の演劇觀其物にある。<sup>(6)</sup>

と述べている。ワイルドの作品の評価という面だけでなく、ワイルドの劇作家

としての態度に対する是非について触れていることはこれまでとは異なった内容である。しかし、この紹介がメッシュエン社の『ワイルド全集』(全 13 巻)の出版に伴うことを考えれば、ワイルドへの関心の高さが逆に現れていると言えよう。

### (3) 童話・小説の紹介

童話や小説の翻訳も明治 43 年(1910)2 月の里見弴訳「鶯と薔薇」(『白樺』第 2 巻第 2 号)、M.K.訳「鶯と薔薇」(『太陽』第 16 巻第 3 号)をはじめ、同年 7 月の田波御白訳「我儘な巨人」(『帝国文学』第 16 巻第 7 号)、同年 10 月の本間久雄訳「秘密を好める女」(『早稲田文学』第 59 号)、田波御白訳「親友」(『東亜之光』第 5 巻第 10 号)、明治 43 年(1910)1 月の本間久雄訳「『ドリアン・グレイ』の序文」(『早稲田文学』第 64 号)、明治 44 年 8 月の天沼匏村訳「恋の創傷」(『心の花』第 15 巻第 8 号)などが上げられる。実際に翻訳されている点が大きな成果と言えるだろう。「鶯と薔薇」「鶯と薔薇」「恋の創傷」は、いずれも“Nightingale and the Rose”の翻訳である。この作品が積極的に紹介されたことも注目しておきたい。

### (4) 警句の紹介

ワイルドの警句(アフォリズム)を紹介したものとして取り上げておかなければならないのは、明治 42 年(1909)5 月の厨川白村「オスカア・ワイルドの警句」(『帝国文学』第 15 巻第 5 号)と明治 45 年(1912)1 月の生方敏郎「オスカア・ワイルドの警句集」(『早稲田文学』第 74 号)であろう。

厨川白村「オスカア・ワイルドの警句」についてまず紹介しておきたい。

近代に於ける英語の書に就ていへば、マアティン・タバアの『諺哲学』、ジ○オチ・エリオットの『シオフラスタス・サッチ』は此類の書として名あれど、必ずしも多くいふに足らず。またかのメレディスの小説は甚だ警句に富み、此點に於ても大に注目すべきものなれど、之等を外して、別に

またオスカア・ワイルドが『セバスティアン・メルモス』の一巻の如きをも忘るべきにあらざるべし。<sup>(7)</sup>

ワイルドのアフォリズムについては同年同月に発表された夏目漱石「メレディスの訃」(『国民新聞』5月21日～22日)の中でも触れられている。

オスカ -、ワイルドの使ふアフォリズムがよくあれに似てるのがある。併しオスカ、ワイルドのは哲学ではない。気の利いたウヰットのやうなものだ。<sup>(8)</sup>

実際に厨川白村が取り上げたのは38のアフォリズムがあるが、その最初の2つのものを原文と共に紹介しておきたい。

He who stands most remote from his age is he who mirrors it best.<sup>(9)</sup>  
最も遠くおのが時代を離れて立つ人こそ、最もよくそをうつす人なれ。<sup>(10)</sup>

There is only one thing in the world worse than being talked about,  
and that is not being talked about.<sup>(11)</sup>

人に噂せらるるよりも尚ほ悪しきこと、此世に誰だ一あり、そは人に噂せらざる事なり。<sup>(12)</sup>

次に生方敏郎「オスカー・ワイルドの警句集」を見てみよう。この警句集では前説や説明はなく、警句は170が翻訳されている。その最初の2つのものを原文と共に紹介しておきたい。

Women are made to be loved, not to be understood.<sup>(13)</sup>

女は理報さる可きものとして造られず、愛せらる可きものとして造られ

た。(14)

It is absurd to have a hard and fast rule about what one should read and what one shouldn't. More than half of modern culture depends on what one shouldn't read. (15)

読むでも可いとか悪いとか云ふ事で、堅くらしい動きの取れぬ規則を立てるのは愚の骨頂だ。近代文明の過半は、読むではならぬとせられたものゝ方を蔭だ。(16)

ワイルドの死後、1905年の*De Profundis*の出版と共に再評価の機運が高まって来たこと、また、1920年には本邦初の『ワイルド全集』も矢口達監修のもと、天佑社より出版された経緯を見ると、明治晩年はこれまでのデカダン論中のワイルド紹介と違い、ワイルドの作品自体が翻訳として紹介されるようになったのだ。

#### (5) 小山内薫のオスカー・ワイルド紹介

小山内薫(1881-1928)は劇作家、演出家として知られているが、東京帝国大学文学部英文科を卒業し、明治40年(1907)には同人誌『新思潮』(第1次)を創刊し、第6号まで西欧の演劇評論や戯曲を積極的に紹介した。明治42年(1909)には市川左団次(1880-1940)と共に自由劇場を結成。第1回公演のイプセン/森鷗外訳『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』は日本の新劇史上に残る重要な起点となっている。小山内は明治晩年から大正初年にかけて、モスクワ、ベルリン、ロンドンなどを訪れている。大正13年(1924)の関東大震災に土方与志(1898-1959)と共に築地小劇場を創設したことは忘れることはできない。

小山内は、明治41年(1908)5月の『読売新聞』(5月17日)に「オスカ・ワイルドに就て」と明治45年(1912)1月の『演劇新声』(東雲堂)に「オスカ

「ア・ワイルドの諸作」という文章を発表している。

「オスカア・ワイルドに就て」はワイルドに関する評論を紹介している。

僕の讀んだ脚本と云ふのは、『井ンダミア夫人の扇』“Lady Windermere’s Fan”と『眞なる事の必要』“The Importance of being earnest”とだ。評論と云ふのは伊太利人マリオ、ボルザの著『今日の英國劇』の英譯第八十四頁から第九十五頁までだ。(17)

また、次の2冊も紹介している。

ワイルドの牢獄に落ちた所以は、その牢獄で書いたと云うふ『底より』“De Profundis”を讀むか、シエラアド R.H.Sherard の『不幸なる友の物語』“The Story of an Unhappy Friendship”を讀むかすれば分る。(18)

「オスカア・ワイルドの諸作」はメシュエン社のワイルド全集第11巻の批評から「紹介の紹介」をしている。

ワイルドは獨逸に於いては『サロメ』の作者として知られ、佛蘭西に於いては詩人並に批評家として知られ、英吉利に於いては『レディング獄裏吟』“The Ballad of Reading Goal”或は『底より』“De Profundis”の作者として知られてゐる。何處にも統一が無い、何處にもその眞価のある處が分つてをらぬ。それ程ワイルドの著作には變化がある。それ程ワイルドは多方面の詩作をした。(19)

小山内は評論の紹介を通してワイルドの生涯や作品を紹介した。他にも作品の紹介がなされている。

小山内は大正9年(1920)5月には矢口達監修『ワイルド全集』(第3巻)に *Vera; or, the Nihilists*、7月の『ワイルド全集』(第5巻)に “The Truth of

Masks”を翻訳して掲載していることも付け加えておきたい。

#### (6)生田長江『外国文学研究法』

明治41年(1908)10月の生田長江『外国文学研究法』(新潮社)にはワイルドへの言及がある。

また最近に我が文壇などででもやかましく云ふオスカア・ワイルドの、イェツなど、随分色々な人もあるけれど、しかしスモンバアン以後にスモンバアンを凌ぐほどの人はまだ出ない。(20)

生田は明治44年(1911)6月に「藝術家としての耶蘇」(『帝国文学』第17巻第6号)で *De Profundis* に言及している文章も発表している。

#### (6)樋渡正一『今日の書面』

明治44年(1911)3月の樋渡正一『今日の書面』(富田文陽堂)には「ワイルドのシェラードに答へた書面」が収録されている。明治28年(1895)4月のロバート・シェラードに充てた書面である。その全文を紹介しておきたい。

一八九五年四月十六日ホロウエイにて。親愛あるロバート老兄よ。敢為磊落なるわが友よ。予は驚嘆すべき新消息に満たされた貴翰を非常に歓迎したが、自分の身は悩んで、物悲しい。唯アルフレッド、ドーグラスの日毎の見舞が僅に自分に新しい生命を鼓舞するばかりなるが、自分はこれさへも一種の屈辱と悲劇的の状態とのみを眺めてゐる。サラは絶望と思ふが、老兄が任侠な友誼 實に麗はしい任侠な友誼な全世界の黄金にも勝るものである。(21)

原文は以下の通りである。



16 April 1995

HM.Prison, Holloway

My dear Robert, You good, daring reckless friend! I was delighted to get your letter, with all its wonderful news. For myself, I am ill apathetic. Slowly life creeps out of me. Nothing but Alred Douglas's daily visits quicken me into life, and even him I only see under humiliating and tragic conditions.

Don't fight more than six duels a week! I suppose Sarah is hopeless; but your chivalrous friendship is worth more than all the money in the world. Ever yours OSCAR<sup>(22)</sup>

ワイルドとシェラードについては、*The Oscar Wilde Encyclopedia* (1998)には以下のようにある。

In March of 1883, Sherard first met Wilde in Paris—both, writes Kevin O'Brien (4), "ambitious young writers looking forward to fame and glory." "On that first night in Paris," Sherard wrote in *The Real Oscar Wilde* (1915), "[Wilde] appeared to me one of the most wonderful beings tahta I had ever met, and it seemed to me that there was no prize which the world offers to endeavour and genius... to which he might not aspire." (rpt. In Mikhail 1:119)<sup>(23)</sup>

なお、文中の Kevin O'Brien は "Robert Sherard: Friends of Oscar Wilde," ELT 28:1(1985)のことである。ELT は *English Literature in Transition, 1880-1920* (Greensboro, North Carolina)の略である。また、Mikhail とあるのは E.H.Mikhail, ed., *Oscar Wilde: Interviews and Recollections* (2 volumes)のことである。なお、さらに以下のような説明もある。

Despite such gallantry, Sherard fell from grace when, in November

1894, he attempted to interview Wilde but who, at Christmas dinner, told him that gossip was “ not for publication. ” Crushed, Sherard left the house, as he later wrote in *Oscar Wilde: The Story of an Unhappy Friendship* (1902), “ grieved to think that the end was coming of a friendship which had for many years been the joy and the pride of my life ” (117-18). But when Sherard heard of Wilde’s trial against Queensberry, he sent a telegram offering his assistance, and when Wilde was arrested on 5 April 1895, he proclaimed his support among those in the British community in Paris who had responded with condemnation. ( 2 4 )

この書面の紹介は、日本で最初の「ワイルドの手紙」の紹介ということになるかもしれない。なお、この書面の紹介のあとにワイルドの紹介もある。

明治 28 年(1895)4 月のワイルドとシェラードについては以下のような背景もあったことを付け加えておきたい。

1895 年、パリからロンドンに戻る。この帰国は、その年の 4 月から 5 月にかけて 3 回にわたって行われワイルドにまつわる裁判でワイルドを支援するためだったと言われ、事実 2 回目の裁判の後でワイルドの国外脱出を企てたりしている。ワイルドが服役中は、ワイルドの依頼で、結果は不首尾に終わったが、『サロメ』の上演権をサラ・ベルナールに買い取ってもらうように交渉したり、刑期終了後のワイルドを救えるのは妻コンスタンスしかいないとして、彼女の実家の人たちを説得して 2 人の面会を取り計らい、和解を取りついたり、またボギーを遠ざけるような努力もしている。シェラード自身が「わたしは不幸な友人を捨てないために、多くの友人から捨てられた」と言い、またロンドン滞在中のアルフォンス・ドーデから心配されるほど、ワイルドに対しては助力を惜しまなかった。( 2 5 )

いづれにしてもシェラードは明治 35 年(1902)に *Oscar Wilde: The Story of an Unhappy Friendship* を発表し、この本については明治 41 年(1908)12 月に安成貞雄、明治 42 年(1909)3 月には岩野泡鳴によって紹介されていることを考えると、当時の関心の高さが伺えよう。

### 参考資料

- 井村君江「日本におけるオスカー・ワイルド——移入期(第 1 部)」(『鶴見女子大学紀要』第 7 号、鶴見女子大学、1969 年 12 月)
- 山田勝編『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997 年 10 月
- 佐々木隆「明治時代のワイルド受容」(『武蔵野短期大学研究紀要』第 13 輯、武蔵野短期大学、1999 年 6 月)

### 注

- (1) 国枝史郎「オスカー・ワイルドの死」(上)(『読売新聞』1911 年 5 月 14 日)
- (2) Ditto.
- (3) 是影生「オスカア・ワイルドの戯曲」(『帝国文学』第 14 巻第 7 号、1908 年 7 月), p.900.
- (4) Ibid., p.901.
- (5) Ibid., pp.915-916.
- (6) Ibid., p.917.
- (7) 厨川白村「オスカア・ワイルドの警句」(『帝国文学』第 15 巻第 5 号、1909 年 5 月), pp.615-616.
- (8) 夏目漱石「メレディスの訃」(『国民新聞』1909 年 5 月 21 日~22 日)
- (9) Wilde, Oscar. *Sebastian Melmoth*. (London: Arthur L. Humphreys,

- 1905), p.5.
- (10) 厨川白村「オスカア・ワイルドの警句」, p.616.
- (11) Wilde, Oscar. *Sebastian Melmoth*, p.5
- (12) 厨川白村「オスカア・ワイルドの警句」, p.616.
- (13) Wilde, Oscar. *Sebastian Melmoth*, p.1
- (14) 生方敏郎「オスカー、ワイルドの警句集」(『早稲田文学』第74号、1912年1月), p.261.
- (15) Wilde, Oscar. *Sebastian Melmoth*, p.1
- (16) 生方敏郎「オスカー、ワイルドの警句集」, p.261.
- (17) 小山内薫「ワイルドに就て」(『読売新聞』(5月17日、1908年)
- (18) Ditto.
- (19) 小山内薫『演劇新声』(東雲堂、1912年1月), pp.130-131.
- (20) 生田長江『外国文学研究法』(新潮社、1908年10月), p.211.
- (21) 樋渡正一『今日の書面』(文陽堂、1911年3月), pp.289-290.
- (22) Hart-Davis, Rupert, editor. *The Letters of Oscar Wilde* (London: Rupert Hart-Davis, 1962), p.381.
- (23) Beckson, Karl. *The Oscar Wilde Encyclopedia* (New York: AMS Press, 1998) p.341.
- (24) Ibid., p.342.
- (25) 澤井勇「シェラード、ロバート」(山田勝編『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997年10月), pp.158-159.